

【令和6年度実績】

1. 人文社会科学の国際展開

「研究」

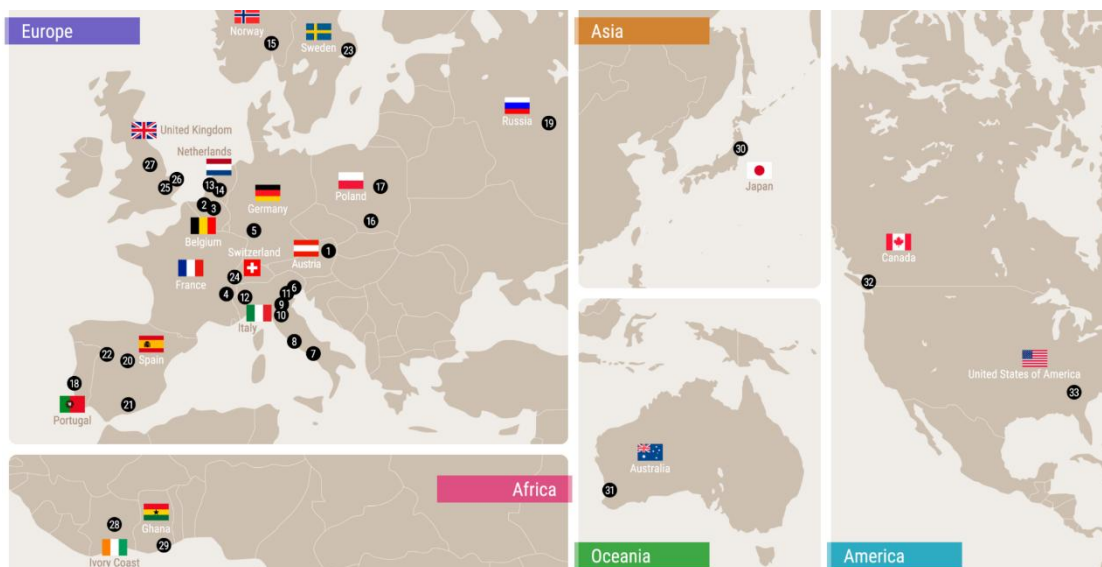
No.18 (1)-1 自由な発想に基づく基礎研究の推進および新興・分野融合研究の開拓, No.20 (2)-1 社会の要請に応える研究の推進, No.22 (3)-1 優秀な若手研究者の活躍促進

実績報告

I 支倉リーグの拡大と強化

東北大学を起点とした人文社会科学の研究と教育のための国際的ネットワークである「支倉リーグ」について、2022 年採択の「支倉宣言」に基づき、更なるネットワークの拡大と連携の強化を進めた。

2023 年度には新たにケンブリッジ大学(イギリス)ワルシャワ大学(ポーランド)などの欧州の名門校、また地域的には新たに米国のジョージア大学やオーストラリアのカーティン大学が加わった。2024 年度にはブリティッシュコロンビア大学(カナダ)やアフリカのアラサン・ウアタラ大学(コートジボワール)とガーナ大学(ガーナ)が参加した。アフリカ・戦略的若手インターンシッププログラムにより、アラサン・ウアタラ大学から学生を一名受け入れ、アフリカ方面のネットワークを強化拡大した。



Europe

- | | |
|---------------------------|------------------------|
| ① ウィーン大学 (オーストリア) | ⑮ オスロ大学 (ノルウェー) |
| ② ヘント大学 (ベルギー) | ⑯ ヤゲェウォ大学 (ポーランド) |
| ③ ルーヴァン・カトリック大学 (ベルギー) | ⑰ ワルシャワ大学 (ポーランド) |
| ④ グルノーブル・アルプ大学 (フランス) | ⑱ リスボン新大学 (ポルトガル) |
| ⑤ ハイデルベルク大学 (ドイツ) | ⑲ モスクワ国立大学 (ロシア) |
| ⑥ ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学 (イタリア) | ⑳ マドリード・アウトノマ大学 (スペイン) |
| ⑦ ナポリ東洋大学 (イタリア) | ㉑ グラナダ大学 (スペイン) |
| ⑧ ローマ大学ラ・サピエンツァ (イタリア) | ㉒ サラマンカ大学 (スペイン) |
| ⑨ ボローニャ大学 (イタリア) | ㉓ ストックホルム大学 (スウェーデン) |
| ⑩ フィレンツェ大学 (イタリア) | ㉔ ローザンヌ大学 (スイス) |
| ⑪ パドヴァ大学 (イタリア) | ㉕ ケンブリッジ大学 (イギリス) |
| ⑫ トリノ大学 (イタリア) | ㉖ イーストアングリア大学 (イギリス) |
| ⑬ ライデン大学 (オランダ) | ㉗ シェフィールド大学 (イギリス) |
| ⑭ ユトレヒト大学 (オランダ) | |

Africa

- ⑳ アラサン・ウアタラ大学 (コートジボワール)
㉑ ガーナ大学 (ガーナ)

Asia

- ㉒ 東北大学 (日本)

Oceania

- ㉓ カーティン大学 (オーストラリア)

America

- ㉔ ブリティッシュコロンビア大学 (カナダ)
㉕ ジョージア大学 (アメリカ合衆国)

II ネットワークを活用した研究・教育の国際展開

日本学国際共同大学院ではフランス(グルノーブル大学)、イタリア(ヴェネツィア大学・ローマ大学・トリノ大学)、日本(東北大学)で国際ワークショップを開催した(計 7 回)。シリーズとして継続している支倉セミナーは 3 回実施し、ウィリアム・アンド・メアリー大学、バル＝イラン大学、香港大学から講師を迎えた。

心理学研究室が中心となり東北大学川内南キャンパスで第一回アジア国際心理学会(チュロンコン大学、台北医学大学、パジャジャラン大学)を開催し、アジア地域の心理学研究のネットワーク拠点を形成した。

韓国忠南大学で、一般参加者にも公開された日韓国際シンポジウムを開催した。文学部から教員・大学院生 4 名が登壇して研究の交流を深めた。2025 年度にも同シンポジウムを開催する予定であり、参加国が日中韓に拡大する見込みである。

III 統合日本学センター開設と拡充

2023 年 10 月 1 日に、文学研究科がイニシアティブをとって統合日本学センターを開設し 2024 年度には新たな専任教員 4 名(教授 1 名助教 3 名)・兼務教員(7 名)を採用した。日本学を専門とする外国人研究者の雇用、国内外の研究者との共同研究などにより国境やジェンダー、人文

系・社会科学系・理工学系といった分野・方法論の壁を超えた「統合」により新しい人文知の形成と発信を目指す。

IV 各賞の受賞と著書の刊行による研究の発信

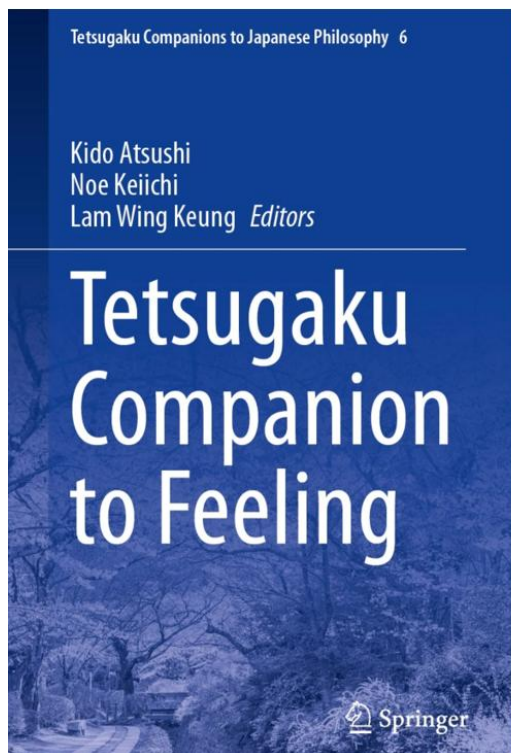
所属教員が以下の各賞を受賞すると共に、女性・若手研究者が下記公募課題に採択された。

2025 Leonard Bloomfield Book Award (Linguistic Society of America)受賞 小泉教授。

2024 年度 東北大学優秀女性研究者賞「紫千代萩賞」受賞 内藤准教授。

2024 年度 Sokap-Seeds の公募課題採択 小松原准教授・問芝准教授。

また所属教員の書籍刊行(2024 年度共編著 4、単著 2)により研究成果を社会に向けて発信した。



 [研究 1.png](#),  [研究 2.png](#),  [研究 3.png](#)

・教育の国際性と多様性の促進

「教育」

No.25 (4)-2 ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョンを尊重する「共同参画」体制の構築
実績報告

I. 業務委託制度等の積極活用による教育の国際性と多様性の拡大

1. 業務委託制度の活用による国際教育の多様性の拡大

業務委託制度を通じて海外研究者による授業を実施した。集中講義にとどまらず、リアルタイム Web 授業や共同授業・研究、国際シンポジウム(チュラロンコン大学[9/17-19]・中正大学[9/10]共催)など、多様性拡大に大きく貢献した。

2024年度「海外研究科との業務委託契約に関するガイドライン」に基づく業務委託

	申請者専攻分野	委託者氏名	所属	職務	性別	委託業務
1	心理学	Juthatip Wiwattanapantuwong	チュラロンコン大学(タイ)	講師	女性	1. 「心理学各論I」のリモート授業(後期毎週) 2. 国際シンポジウムの実施(前期) (国際合同授業の開催も予定するが、委託業務外とする)
2	心理学	戴 伸峰	国立中正大学(台湾)	教授	男性	1. 「心理学各論I」のリモート授業(前期毎週) 2. 国際シンポジウムの実施(前期) 3. 「心理学総合演習II」における学生指導(後期1コマ)
3	日本学	金 銀貞	忠南大学(韓国)	准教授	女性	共同研究(東アジア仏教と王都・辺境)
4	文化人類学	Emmanuelle Gangloff	ナント大学(フランス)	研究員	女性	都市における文化プロジェクトと再開発の日仏比較に関する共同研究(前期)

2. クロスアポイントメント制度の積極的な活用による他大学との交流の進展

2024年3月、東北大学とお茶の水女子大学のクロスアポイントメント協定を改定し、同大学の大森美香教授が本学でも勤務(エフォート10%)。両大学間、さらに国内外の学生交流の発展に寄与した。

3. 日本学国際共同大学院プログラム

日本学国際共同大学院(GPJS)は、本学の人文科学・社会科学の特色と強みを基盤とし、海外の教育研究機関(「支倉リーグ」)と連携して、新たな学際領域としての「日本学」の構築を目指すプログラムである。2024年度には、ローマ・ラ・サピエンツァ大学およびヴェネツィア大学において大学院生を対象とした国際ワークショップを開催するなど、世界で活躍できる研究者の育成に向けた取り組みを一層推進した。

4. 食科学国際共同大学院プログラムへの参画

食科学国際共同大学院プログラムは、農学研究科を中心に、医学、歯学、薬学、文学の各研究科の大学院生を対象とした横断的な教育プログラムである。本プログラムでは、食品そのものに関する科学的知識に加えて、食品の機能性やSDGsとの関連、食の社会的価値や倫理といった、食と社会との多面的な関わりについても幅広く学ぶことができる。2024年度および2025年

度には、それぞれ7名の大学院生が新たに参加した。文学研究科からは、大学院生2名が本プログラムに参加しており、加えて3名の教員が「食と心理・経済」に関する授業を担当している。

5. JST さくらサイエンスプログラムへの参画

2025年1月4日～10日、中国・武漢大学から教員1名と学生4名が来訪。茶道体験や特別講義、相互研究発表を実施した。



6. 「登録日本語教員養成機関・登録実践研修機関」認定

日本語教育学専修が2024年11月に文科大臣より認定を受け、2025年4月より「登録日本語教員養成プログラム」を開始予定。

7. KEYAKI 日本語・日本文化研修プログラム実施

東北多文化アカデミーとの共催で、7月28日～8月10日にKEYAKI 日本語・日本文化研修を実施し、海外学生の受け入れを推進した。

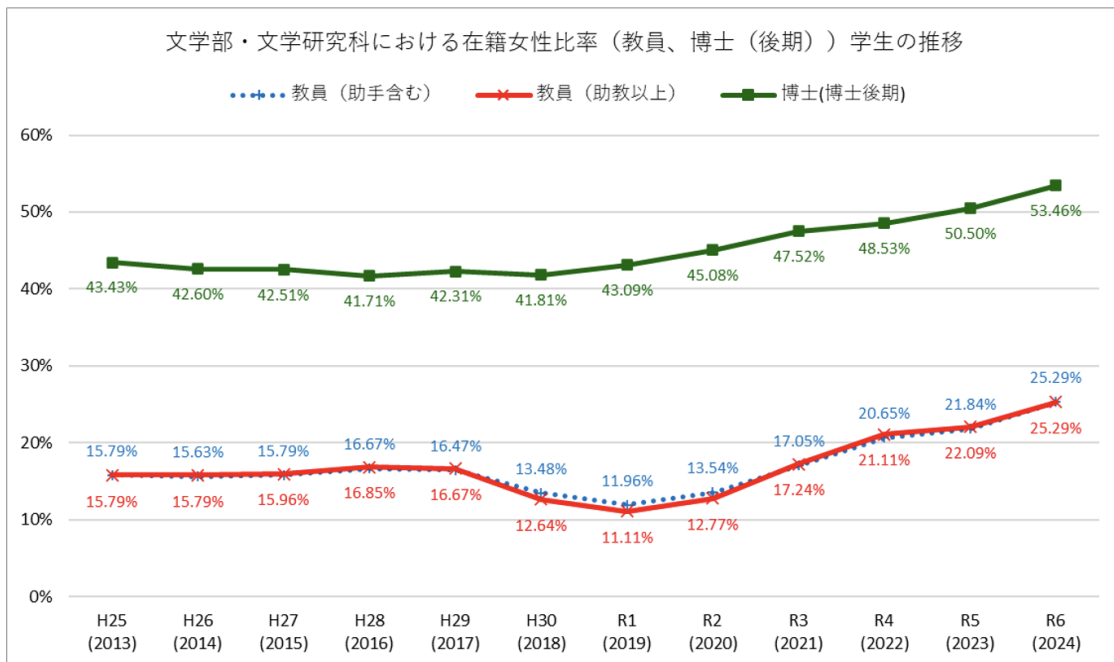
II. 教員および大学院生における女性比率ならびに外国人比率の向上による教育のダイバーシティの促進

1. 女性研究者比率向上

正規採用における女性優先により女性研究者比率を25%に、業務委託を含め27%に引き上げた。

2. 女性大学院生比率向上

博士後期課程において、女性学生の比率が53%に達し、男性を上回った。



3. 外国人研究者比率の推移（目標値 12%を達成）

業務委託制度の継続により外国人研究者比率は 15.9%となり、目標の 12%を大幅に上回った。

4. 大学院博士課程後期3年の課程の IGSAL(国際大学院コース)の学生の受入れ拡大

2023 年度に設置した IGSAL に、2024 年度は新たに 3 名の大学院生を受け入れ、多様性を一層促進した

 [教育図 2.png](#),  [教育図 1.png](#),  [教育図 3.png](#)

3. 文化の新たな発展に向けての社会との連携

「社会との共創」

No.06 (2)-4 「社会とともにある大学」としての社会連携の強化

実績報告

I. 老いと死という現代社会の課題に取り組むー臨床宗教師養成プログラムの継続ー

文学研究科では超高齢多死社会を迎えている現代日本における老いと死をめぐる不安や悲嘆への対応を課題として、2012 年以来、臨床宗教師の養成を着実に継続してきた。2024 年度も、死生学・実践宗教学専攻分野を中心に、一般社団法人日本臨床宗教師会が認定する臨床宗教師を養成するための履修証明プログラム「臨床宗教教養講座」および「臨床宗教実践講座」を開講し、医師、看護師、保健師、訪問看護師、介護福祉士、カウンセラー、セラピスト、僧侶、牧師、医療・臨床系の大学教員・大学院生等、実に多岐にわたる受講生が参加し、それぞれ 29 名および 19 名が修了した。

II. 公文書の保存・管理を担う専門職員を養成する認証アーキビスト養成コースの継続

文学研究科では、2020 年度に始まった日本の認証アーキビスト制度をふまえ、公文書の保存・管理をめぐる社会の要請に応えるために、2022 年度に、国や自治体が設置する公文書館などにおいて働く専門職員であるアーキビストを養成するコースを創成し、法学研究科、災害科学国際研究所、東北アジア研究センター、史料館の教員の協力も得て、アーキビストに必要な専門的な知識、技能、能力を習得するための授業を開講した。2024 年度も本コースの授業を着実に開講し、10 名がコースを修了した。

Ⅲ. 市民の近くで、市民と共に文化を育む催しの継続

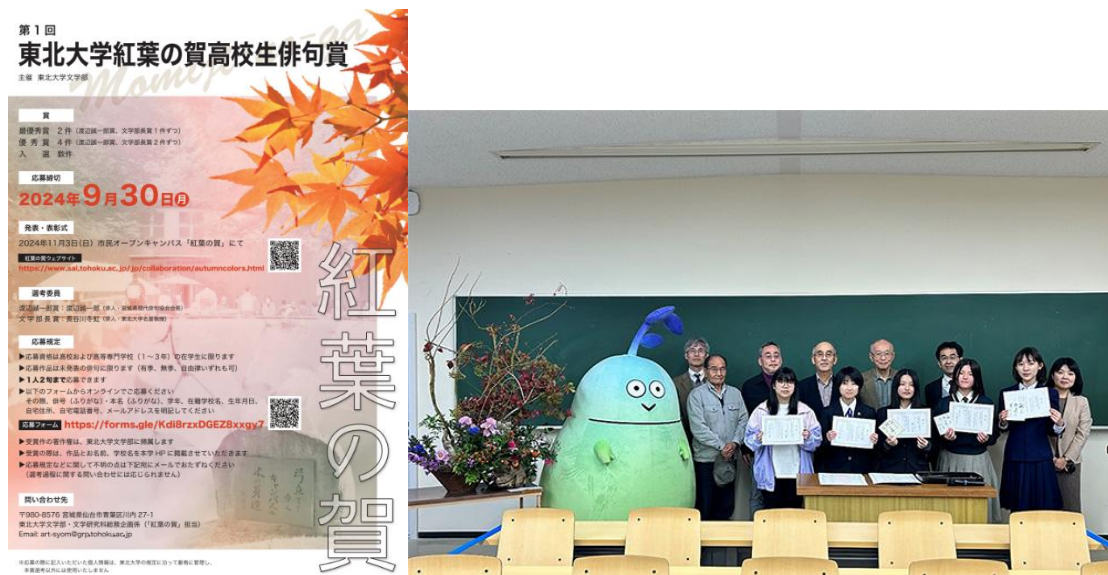
1. 「有備館講座」と「齋理蔵の講座」の開催

文学研究科が市民と共に文化を育む講座として開催を重ねてきた出張講座「有備館講座」(岩出山)と「齋理蔵の講座」(丸森)を次のとおり 2024 年度も開催した。

<https://www.sal.tohoku.ac.jp/jp/collaboration/lectureship.html>

2. 東北大学市民オープンキャンパス「紅葉の賀」の開催

2005 年以来、毎年 11 月 3 日の文化の日に、文学研究科が東北大学植物園と共催している、東北大学市民オープンキャンパス「紅葉の賀」は 2024 年に 18 回目を迎え、さらなる趣向を凝らして開催した。新たな企画として高校生を対象とした「紅葉の賀高校生俳句賞」を設け、全国から多数の応募をいただいた。



https://www.sal.tohoku.ac.jp/jp/collaboration/winner_hs.html

3. 「メトロでカルチャー」の開催

文学研究科では、川内キャンパスが地下鉄東西線の開業によって利便性の増したのを機に、本キャンパスを会場として、2015 年度から、市民向けの公開講座「メトロでカルチャー」を開催している。2024 年度は「英語で学ぶ人文学—英語学、英文学、そしてその向こうへ—」と題し、2名の教員による講演を行った。

4. 図書館における展示

文学研究科の教員が中心となり、図書館で以下の3回の企画展を行った。

- ・総合知デジタルアーカイブ公開記念展示「チベット仏教の精華」(11/18-12/13)
- ・令和6年度企画展「源氏物語 みやびの継承」(10/28～11/8)
- ・展覧会「筆墨にやどる思い—江戸絵画のこころに触れる」(2/5～14)



 [企画展源氏物語.png](#),  [紅葉の賀高校生俳句賞.png](#),  [紅葉の賀高校生俳句賞.jpg](#)

4. 運営の DX 化等による研究時間確保

「教員の研究時間確保」

No.46 (1)-2 全学 DX によるデジタル・キャンパスの推進, No.09 (1)-2 エビデンスに裏付けられた新たなアドミSSIONの展開

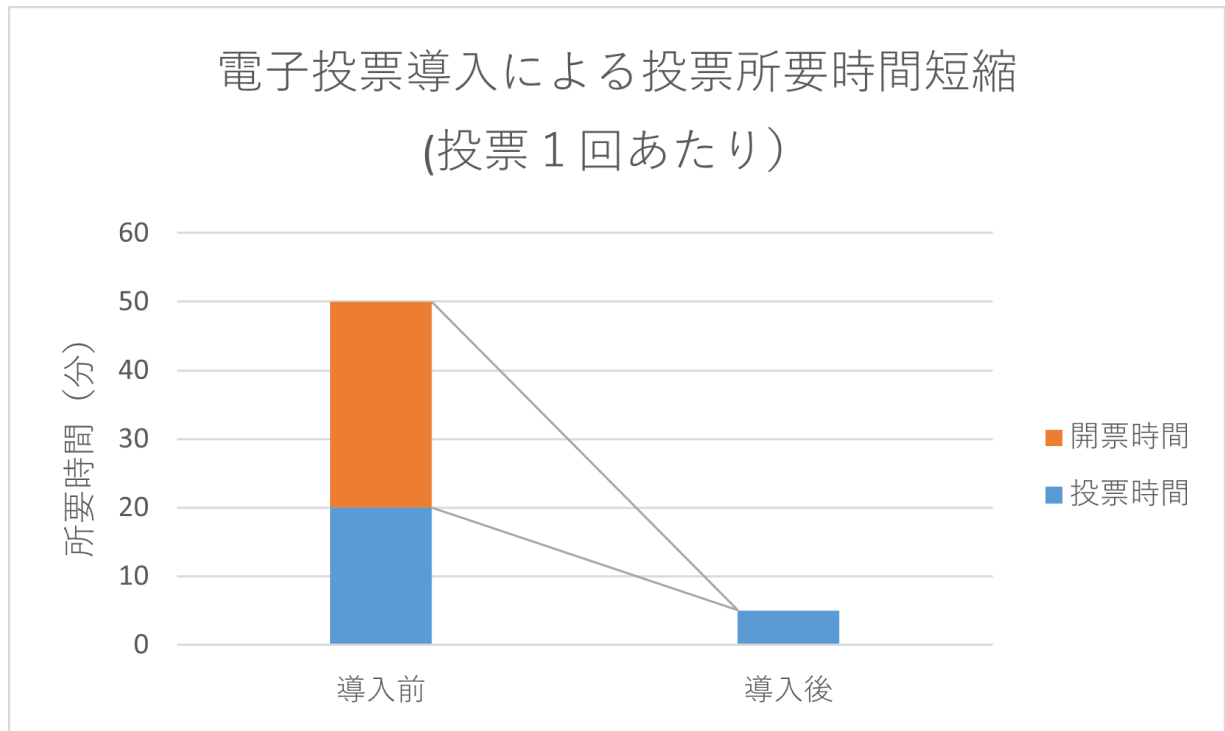
実績報告

I DX 化による教授会等会議時間の短縮

1. 電子投票の導入と拡大

文学研究科では、研究科委員会・教授会の投票による議決事項について、紙での投票を Google Form を用いた電子投票に変えることで、それまで投票に 20 分、開票に 30 分を要して

いた議決にかかる時間を 2-5 分程度(開票作業はほぼ 0 分)にまで短縮し、年間で見れば 24 時間程度の会議時間短縮を実現した。



さらに 2024 年度にはそれまで技術的問題から Google Form による投票が困難であった研究科長予備候補者選挙および研究科長候補者選挙についても、本部提供の「電子投票アプリ」の採用によって計 4 回の投票をすべて電子投票とすることができた。

○ 文学研究科長予備候補者の選挙 (第一次投票・第二次投票ともに「電子投票アプリ」を) 使用して行います。

日 時 : 第一次投票 【以下の期間に、電子投票アプリにアクセスしてご投票ください。】

2024 年 12 月 16 日 (月) 12 時 15 分 投票所の開所・空き箱確認※

〃 12 時 30 分 投票開始

2024 年 12 月 18 日 (水) 12 時 00 分 投票終了

〃 12 時 15 分 開票※

第二次投票 【第一次投票結果に基づいて、以下の期間に、電子投票アプリにアクセスしご投票ください。】

2024 年 12 月 18 日 (水) 12 時 45 分 投票所の開所・空き箱確認※

〃 12 時 55 分 投票開始

2024 年 12 月 19 日 (木) 12 時 00 分 投票終了

〃 12 時 15 分 開票※

2. 教授会運営のDX化

電子投票以外にも、Google Drive で共有された議題依頼フォームの使用により教授会開催週に運営会議メンバー全員で行っていた議題整理会議を廃止し、少人数での打ち合わせに変えた。これにより多くの運営会議メンバーが年間 11 回(1 回 2 時間程度)の会議から解放され 22 時間程度の研究時間確保を実現することができた。その他、研究科委員会・教授会において、一部の議題については説明を書き込んだ事前配布資料を用いた「メール審議」方式を用いることで、丁寧な説明と審議時間の短縮の両立を図っている。また 2024 年度後期から研究科委員会・教授会をハイブリッド形式で開催することとし、病気などの構成員に配慮するとともに出張等研究活動への制約を小さくした。運営会議についてはオンライン開催を継続している。

Ⅱ 大学院入学試験の科目、時期に関する見直し

文学研究科では大学院入学試験の科目の整理を行うことで効率化を図り、入試業務の負担軽減と確実性向上を両立させる改革を行った。また入学試験時期の見直しと会議の時期の工夫によって9月をひと月まるごと研究に専念できる期間として確保し、長期にわたる実験や調査を中断することなく実施できるようになった。

これまで文学研究科の前期課程一般の入試科目は、共通の外国語(120 分)のほかに専門分野ごとの専門科目Ⅰ(120 分)と専門科目Ⅱ(任意・18/26 専攻分野が実施)および面接となっていた。その中で専門科目Ⅱは実施する専攻分野としない分野があり、外国語と重複する内容も多かったため、効率面のみならずミスを防ぐ上でも問題が多かった。そこで文学研究科では、専門科目ⅡをⅠに統合し、原則的に外国語(120 分)と専門科目(120 分)と面接に整理した。その上で研究分野の特性にも配慮し、どうしても必要な専攻分野(7/26 専攻分野)にのみ、特別科目として史料読解や第二外国語などの試験を課すことを認めた。

2022年度までの大学院入学試験（前期課程一般）

外国語(120分)	専門Ⅰ(120分)	専門Ⅱ(100分)	面接
-----------	-----------	-----------	----

2023年度以降の大学院入学試験（前期課程一般）

外国語(120分)	専門(120分)	面接	特別科目 (7専攻分野)
-----------	----------	----	-----------------

また文学研究科ではこれまで9月と1月の下旬に実施していた大学院入学試験について、それぞれ8月と2月の上旬に行うこととし、今年度それを実施した。さらに入試準備や判定会議の時期に工夫を加えることで、9月をまるごとひと月研究に専念できる期間とした。

 [★電子投票による時間短縮.png](#),  [★大学院入試科目.png](#),  [研究科長選挙公示文.png](#)